

令和4年度第1回 いいづな歴史ふれあい館協議会

会議録 要旨

日時：令和4年(2022) 5月18日(水)

10:00~12:10

場所：いいづな歴史ふれあい館 小ホール

1 開 会

富樫 これより、令和4年度 第1回協議会を開催します。

2 あいさつ

馬島教育長 本日はありがとうございます。小さな町として予算は限られていますが、この館が町民に開かれた館になるよう皆さまのお知恵をいただきたい。よろしくお願いします。

中村会長 年度が変わり陽気がよくなりお忙しい中、お集りいただきありがとうございます。昨年から2025年の町制20周年記念の節目における館のリニューアルに向けての検討を詰めてきて、この4月5日に私と宮本職務代理の二人で教育委員会に『基本構想への提言書』をお届けした。委員の皆さんの考えを存分に酌む形にできたかどうかはわからないが、できるだけ実現できそうな、夢がもてそうな中身を盛り込み、提言させていただいた。今日は、提言を受けて館から発信された基本構想と、今後に向けた検討ができるかと思います。意見を十分に出し合える協議会にしていければ。理想を語り合うと「金がなくて無理」という行政の立場の問題意識もあると思うが、50年後まで続いていく町の拠点になるような歴史ふれあい館にしていくには、今出来ることに限らず、将来に向けての夢を語り合い、根幹のここだけはしっかりとしておくということを大事にしたい。昨年までの協議で、皆さんそこは共通意識をもっていたと思っています。それにつけても、2025年という節目に向けたスタートをきったわけですので、館長さんやふれあい館の方々が仕事をすすめやすいようにサポートができればと思っていますので、よろしくお願いします。

富樫 ありがとうございます。では資料確認、出席者確認。それと、ご自身のご都合により任期途中ですが小林委員の退任希望がありましたので、4月一杯でご退任いただいたことを報告。

3 議 事

中村 本日は、資料の説明はなるべく端的に、委員の皆様からは「こうしたらどうか」「これを大事に」とか自由にご意見を言っていただきたい。とくに令和4年度の特別展の中身について「こういったことも取り入れたらどうか」といったアイデア出しなどに時間をとりたい。

(1) 歴史ふれあい館協議会委員名簿の変更について

富樫 報告の通り、委員の1名が退任され協議会は現在9名の委員で構成されています。

中村 よろしいですか。では(2)の基本構想と基本計画の予定について。とくに基本構想については経過を含めて説明をお願いします。

(2) 歴史ふれあい館基本構想と基本計画策定予定について

富樫 資料2が館の「基本構想」です。構想については4月下旬の定例教育委員会に諮られて承認をいただき

基本構想として公的に位置づけられた。先ほど中村会長から紹介があったとおり、3月30日に『「基本構想」への提言』が教育委員会に提出され、4月5日には中村会長と宮本職務代理のお二人から馬島教育長と私への「受け渡し式」を執り行いました。その提言書の内容を受けて、ごく一部に加筆し、館の立場から「こうしていく」という形に表現を変え、改めて館の「基本構想」としてまとめさせていただきました。表紙のあとのあいさつ文の中に「基本構想」が出来るまでの経緯が記してあります。今後は、この構想をもとに計画をつくり、具体化していく段階に入ります。協議会の提言書をまとめる過程でも、委員の皆様からはたくさんのご意見をいただき修正をしました。さらに基本構想にする時点で新たに修正を加えた箇所は、12ページ中ほどにあります。飯綱町の第2次総合計画後期基本計画を引用し、当館のリニューアルが町の総合計画でどう位置付けられているかを示しました。町の計画には館のリニューアルと機能強化が盛り込まれていますが、具体的な内容までは示されていないため、そこをどう具体化していくかが、これからの検討になります。その他は、ごく軽微な修正です。説明としては以上です。

中村 ありがとうございます。3月にまとめられた提言の大部分がその通りに構想に盛り込まれたということです。

13ページのところに「町を包括する内容の特別展テーマの候補」として(1)から(4)があり、(1)はもう済んでいます。(2)の「飯綱町と水の恵み」は今年度開催予定の特別展ですし、(3)の「町の食べごとと文化」と(4)の「災害」については、「食べごとと文化」のほうが準備が進みそうだということで、(3)と(4)のテーマの順番を入れ替えて計画をすすめています。とくに「食べごとと文化」は宮本職務代理さんが中心になって大きな成果をあげてくださっていますので、それらをまとめていければとのこと。町の計画の①にも食育活動のことが書かれてあります。では、資料3のほうをお願いします。

富樫 基本計画についてはこれからという段階です。策定の流れは、構想の具体化のために、施設の現状と計画、展示の現状と計画があります。展示コンセプトも見直しすべきところは見直す。館の活動の現状と課題、どういう活動をしていくのかも計画の一部になります。他に、他の施設との連携という課題も出てきます。策定主体は教育委員会と歴史ふれあい館が中心になります。前の議論にもありましたが、「町づくり」という視点を入れるとすれば役場の関連する部署との協力関係や連携を考えたほうがよい。そして主役である町民の方々から、策定にあたってのご意見を集めたいと思います。策定方法として、素案や案の作成のために新たな検討委員会は設けず、基本はこの協議会の中で検討をしていく。素案の提案と意見集約には、ワークショップやパブリックコメントなどをもとにすすめ、計画案のとりまとめには一部外部委託を入れて体裁の良いものを作りたいと考えます。概略のスケジュールは資料のとおりです。参考として、新十日町市博物館基本計画書をつけました。博物館の規模は全く違うので、同じことができるということではないですが、博物館としての基本計画はこんな風に考えていくということで参考になります。他の市町村や県の博物館などで公表されている基本計画を見ながら、独自性のある飯綱町の計画を作っていきたいと思えます。資料説明は以上です。

中村 ありがとうございます。何か質問やご意見はありますか。

委員 計画はけっこうハードスケジュールになっていますが、6月の協議会ではたたき台となるような資料を作っていたらとありがたい。

富樫 用意するようにいたします。

中村 今日の資料の基本構想19ページに「いづな歴史ふれあい館のリニューアルに係る方針」がある。

「歴史文化の拠点づくり構想」と20ページには見取り図が載っている。こういう大まかな計画に即して、より具体的なアイデアや意見があれば。

富樫 「拠点づくり構想」は昨年3月にまとめたものでかなり漠然とした構想ですが、それを1年かけてより具体化し「基本構想」に反映されたということになる。

委員 災害については、様々な文献資料とかでまとめられると思うが、事前に準備をしていかないと陳腐なものになってしまうのではないか。そういう資料はあるか。

富樫 以前、歴史ふれあい館でも善光寺地震の際の復興に富くじを取り入れたとか、そういう展示も行って
いるが、その後の新しい研究成果もあり、ここが善光寺地震の震源の直上にあったということがわかってきている。そういうことも含めて、今現在私たちがどういうところに住んでいるのか、それをわかりやすく示したい。脅かすだけではなく、同時に希望がもてるような内容で。

委員 以前とは全くちがうフェーズに地球が入っているというところを強調していただくことと、今までの歴史とこれからここに住んでいく皆さんがどういう観点をもてば安全に暮らせるか、歴史から何が学べるかをわかりやすく示してほしい。もうひとつ、外から新しくここに来る人たちにどういうところを注意してもらえば安全な暮らしになるか、そこを出せると人口増や町づくりにもつながるのでは。

富樫 災害への備えとともに、ここがいかに住みやすいところかということも併せて示したい。

委員 特別展については、「用水」は小学校4年生の学習でとりあげるし、「食べごと」については1年生から
中学3年生までいろいろな形で学ぶことになっている。「災害」は、中学1年生が危険箇所について毎年学習しているので、リアルタイムで学校の学習が繋がっているところがある。館とうまくつながってできるといいし、それができると住民も自分のこととして関心をもってもらえる。

中村 学校教育のカリキュラムの中でも位置づいているという話でしたが、これはとても大事なことで、学芸員が
こうするというのではなく、できれば特別展の中に子どもさんたちの教育活動がリンクできないか。小学校の場合にはコメづくりもやっている。水の恵みも、自然条件として飯綱町がいかに米作に適していたかということや、災害に関わる面でも使えるし、子どもたちが会場で説明できる場とか、そういうのも考えられないか。

委員 学校との関連ということでうれしい話が聞かれましたが、すでに小学校では田んぼづくりに関わり、協力が
すすんでいまる。2年生も豆づくりで味噌づくりにも挑戦し、高校でもそういうことがすすんでいる。郷土

料理を学ぶ活動の中で、町の食の歴史を知りたいという声もあった。長野市から通っている生徒さんが多いが、町内の子どもさんに限らず、そういうことを知ってもらえるいい機会になるかと思う。そういうのが特別展にもつながるといい。町の企画と食に関する事業の打ち合わせをする機会もできたので、ぜひ館の事業にもつなげていきたい。それと、コロナの影響でできなかったが、若い人たちに伝え次世代を育てる「食の匠」講座が今年再開する予定。ここに移住してきたような人がとても興味をもっていると聞いているので、グループづくりをやりながら、特別展などにも関わってもらえる方法も考えていきたい。

中村 子どもたちが活動をしていることと結びつけて、特別展がひとつのきっかけになって、教育と館の活動が連動してくると、リニューアルに際しても住民参加型の活動につながっていくかと思う。

委員 食に関してだが、食べることだけでなく、つくるところから考える取り組みもあります。安全に、ここでなければできない食べ物を自分たちでつくるようなことが、若い人たちの中で動いているようなので、そういう現在の取り組みも入れていけるといい。

中村 とくに他所から移られてきた方たちとか、若い子育て世代の皆さんは、食の安全や、豊かさの中に安全という意味も入ってきている。そういう人たちの取り組みが展示され、説明してもらえる場ができるといい。

馬島 大局的にみたときに、ウクライナの軍事侵攻のこともありますが、地球上で食料危機が起こっていて、日本の食料自給力が落ちている中で、自分の地域の中で自給できることが大事。宮本さんが言っていた、「家の周りを一周してくるとその日の食材がまかなえる」という話のように、そうしていかないと自分たちの命をまもられないのではないかな。農業を基盤とした町づくりの中で、過去の食から学ぶことは未来への大切なメッセージになる。そういう視点を出してもらえるといい展示ができるのでは。食はいろんなアプローチができて、命に直結することでもあるので、やりがいのあるテーマだ。

委員 町が何年かぶりに少し人口が増えたという話も聞いたが、先日移住者の方と話す機会があった。横浜から来た元県職の方で、60歳で定年になるとともに「飯綱町で楽しみながらりんごづくりをしたい」ということだった。そういう人たちからも情報を発信してもらえればと思うし、何でこの町だったのかということもさらに深く聞いてみたい。

中村 うちの孫も、私が畑で何かやっていると「じいちゃんそろそろアレ採れる？」って言い始めてきた。私は専業農家でもないが、退職後に時間があれば畑に行っている。たとえば、キュウリやナスは、今は年がら年中食べられるが、「もうそろそろアレ採れる？」っていうのを聞いて、子どもって無関心なようできて期待しているのかなと、作り手としてはそういう関心をもってもらえることがとてもうれしいもの。それだけでも家族の中でちょっとちがった会話ができる。そういうところに目を向けている子どもに、実は自然が豊かだということなんだということを知ってもらえればと思う。食のマンガにもあった「初物」という言葉も、今の子どもたちは知らない。「初物」をお仏壇にちょっとあげてね、というようなことが日常にまだ残っていることがとても大事なこと。

委員 広報のマンガでは行事食はだいたいやりつくしたので、今度は日常の食べ物でやっつけようと思って

いる。味噌とか、夏の冷や汁とか、ごく日常のものを季節ごとにテーマにしていきたいと相談している。

委員 学校では学習の結果を共有するような場面で、博物館と住民の皆さんに広げた形で報告ができると、通常のカリキュラムの中で無理なくできる。理科のイネの学習では、バケツ稲でやれば十分ですが、田んぼを使う。お祭りという一萬度という積算の温度の意味などは、理科だけでは学べない。そういうことが里山にある学校ではやれる。それが魅力で、修学旅行でこういうところを選んでくる学校もあるというのもよくわかる。この地の利点を大いに発揮してもらえれば。

中村 食文化の話題がいろいろ出ました。では今年度の特別展について資料 4・5 についてお願いします。

(3) 令和 4 年度の主な行事予定と特別展企画（案）について

富樫 資料 4・5、年間予定の説明。夏休み企画として特別展と連動させての芋川堰隧道のトンネルを歩く探検をやりたい。また牟礼地区では大門川という水源の川があり、こちらも探検をしてみたい。こういう体験会の実施が難しいようであれば、水に関わる別のプランも考えてみたい。秋の特別展の企画案、展示構成、関連事業の予定について概要を説明。

中村 一年間の予定されている事業紹介と、特別展の内容について説明があった。
ぜひこうしたらというようなアイデアをいただけるとありがたい。

委員 夏休み企画の用水の見学会ですが、ぜひやっていただきたい。高学年だと子どもたちだけでも来れると思うが、親子に枠を広げ、親も参加していいというようにしてもらえないか。子どもとともに親も楽しさがわかるということにつながっていくのではと思う。私も行きたい。

富樫 大人向けの見学会もやりたいと思っている。

委員 親子で来るというのが大事だ。必ず親子でというのではなく、親も来ていいくらいでどうか。

富樫 親子という意味はよくわかる。ただ親子の参加となって人数設定によって数家族でいっぱいになってしまうとしたら残念な面があり、協力していただく人のこともあるので、少し考えさせてほしい。

中村 親子は大事なコンセプトのひとつ。ナウマンゾウ博物館で見た体験の場は、子どもさんだけでなく、親子で来て、親が夢中になるということはないか。

委員 それはある。親が子どもに説明をする、そのふれあいの体験が重要で、そういうことができる仕掛けづくりが大切。それだけで、皆さんが受けるインパクトは相当違う。体験をどのように組み入れるかがとても重要なポイントになる。

特別展では、飯綱町の地勢図と水系と地質が重要なポイント。これが大きな図面で、自分が住んでいるところがここで、どこから来てどのような水が利用されているかがわかる図、排水も大事。安全な水がどのように得られているかがわかると、そこをきれいにしておかなくてはということもわかる。ナウマンゾウ博では、ナウマンゾウが見つかった場所を大きな地図に示してあって、家の近くにこんなのが出ているということがわかる。そういうようにすれば、町の水と自分との関わりが見えてくる。そういう展示ができて、地質が入ると、逆になぜここに水が出ないのかということも見えてくる。それが用水の開発という先人の仕事につながった

ということが理解されるとありがたい。基本となるデータ、水系と地質との関係、それがあると会話も生まれるし、いいと感じる。

中村 私は生まれは信濃町でおふくろの実家が普光寺です。その姉が同じ普光寺の寺坂に嫁いでいる。小さい頃にそこらに遊びに行くと、すぐそばに用水が流れ、すぐに水がとれて、家に池まであって、洗い物をしたり、魚が泳いでいたり、そういう家がうらやましかった。米作りのための用水ではあったが、用水があることによる水と生活が、こんなにも違うのかと感じた。

委員 もうひとつの観点として地球レベルのことを入れてほしい。これからは水の奪い合いにもなる時代。そういうときに、ここに住む人たちにとって、こういう施設がどれだけ大事なもののか、維持管理の話とか、50年後の将来を見据えた水の恵みという観点を考えてもらいたい。雪が恵みだということも感じてほしい。

委員 私たちも活動していると必ず出てくるテーマで、本当にそんなことがあるかとも思うが、水と食糧の奪い合いがやがてやってくるという話です。子どもたちにそこまで伝えるのはなかなか難しい。そのことにまでつながる展示にできれば素晴らしい。

委員 この展示の大きなターゲットはどこになるか。住民といっても広く考えるととりとめのものになるし、子ども向けばかりでもどうかと思う。多くの人を寄せ付けるのに、展示内容だけでなく、PRとか、人集めの工夫もしてほしい。

富樫 用水なり水源なり、関わりのない人は町に一人もいない。そのへんのことをPRの素材にし、自分が関係しているところの展示があると。

委員 広報するだけでなく、こちらからも出ていかないと。

富樫 たとえば春の水神祭に取材に行ったときに、取材先で「今年特別展をやりますのでその取材にきました」とあいさつをすることも、PRを兼ねている。取材の場でも、ことあるごとに、今年やるんだということを伝え、それもPRに。

委員 最低でも関係された行政の方にはぜひ観に来てほしい。行政も足元暗しで、水関係とか環境とかに関わる行政の方には是非見学をしてほしい。とにかく多くの人に見てもらうことが、リニューアルに向けた企画として大事ではないか。

委員 水と信仰という分野はとても面白い。水神さん祭だけでなく、湧水のときの雨ごい祭もある。倉井で水不足のときは、種池に行って梨三つ持って行って入れてくる。帰りには一升瓶に水入れて、蕎麦屋に寄っても下におろしちゃいけないとか、村史なんか見ても各地で面白いことがあるみたい。赤塩では観音さんをしょっちゅう水に放り込むもんで摩耗してるなんて話もある。そういうことにはけっこう地区の人たちは関心をもつんじゃないか。今でも必ず行くそうです。

中村 水の恵みは自分の生活との関連がとても大事。地球全体の危機も決して遠くの話ではないということが感じられる展示になるといい。もうひとつは、どこの展示会場に行っても、解説はあるが、「なんでだろう」というような疑問形で引き寄せる言葉というのが欲しい。子どもたちにとっても、問いかけがあると見る眼が深まる。水神さんも、なぜそこに祀られているのか、そういう問いかけのある展示が欲しい。

委員 食の関係をやるとき、農と関連づけてというのと同じで、水となると環境も関わる。見学会も施設だけでなく周りの環境も含めると、混み合うことなく案内できる。

- 富樫** 実際の展示を拾い上げていくと水はあらゆることにつながってどこまでも深く広がっていく。今回の特別展で全てを語り尽くすのはできない。水は切り口を変えていくつもの特別展ができるテーマであろう。そのためのきっかけとなる、第一弾の展示にしたい。
- 委員** 会期中が農家の方がけっこう忙しい時期になるのでそれでも観に来たいと思えるような展示に。希望ですが、せっかく水神さんの取材に行っているのでできたら今後のデータなどをビデオで記録を撮り、それを館の収蔵資料として保存していくことが重要。うちも発掘の記録を撮り始めていますが、映像記録があると全然違う。そういったデータベースをつくって、それを生かすような展示コーナーがあると、より身近に感じられると思う。私は畑もやってないんですが、水利組合の委員をやらされて、ほんとに大変だということがわかった。一つの用水をまもののに、どれだけのことがやられているのか、全然知らない人が多い。何かあれば、すぐに連絡して見に行かないといけない。維持管理というのはすごい努力の上に成り立っている。そのような日常のこともビデオで紹介してもらえるといい。
- でも特別展にいろいろと言っていますが、とっても大変な内容で、3人か4人の職員で出来るようなものじゃない。富樫館長さんも言われたように、今回は導入にして、これから長期的に水の問題をとりあげてもらえばいい。用水のことは、この町の根幹をなすテーマでもあるので、スタートラインという位置づけにして、少しづつデータを集めていかれてはどうか。あれも、これもと言われますが、実際はとても大変な内容。盛りだくさんすぎるので、もっと絞ってもいいかも。オーバーワークで倒れないようにして。ただ、ビデオで継続的に記録を残していくことはやってほしい。
- 富樫** 水神祭は多くの地区で時期が重なり一度に多くの地区のことを記録するのは大変。
- 中村** 歴史ふれあい館の人員体制はとても少ないのでなかなか大変だと思う。計画は立てても、こなしていくための人的、時間的、金銭的な限界があって、実際はとても大変。町内で協力できる人を組織していかない。
- 委員** 資料的には、すでにあるものもあるのでは。
- 富樫** これならつくれそう、というものを候補にあげているが、実際大変さはあると思う。
- 馬島** いろいろ題材はあるけれど大勢の協力であんまり風呂敷を揚げすぎるとそれをまとめることが大変になるし、いろいろ入れると焦点がぼけてくる。最初に考えていた「飯綱町と水の恵み」ということで、この町の水はこういうふうに私たちのところに届いているという根幹に焦点をあて、それが生活の中でどう根付いているかということピックアップしていき、あとのことは今後のテーマにしていけると思う。あれもこれもやって焦点がぼけないように。
- 富樫** そこは気をつけていきたい。
- 委員** 芋川用水の雄大さというか戸草と取入れ口から飯綱町に出てくるところになるとすごく高いところに用水がある。安曇野の拾ヶ堰は広いところをゆったりと流れていくが、芋川用水は等高線沿いに30kmも続いて、比較すると特徴がよくわかる。
- 中村** こうして夢が広がるほど実務をする学芸員さんのところに大変さが重くかかってくるかと思うが、この5年、6年の問題ではなく、これからの多くの博物館のリニューアルで出てくる課題に、情報機器関連の活用がある。どういう機器をどのように導入すると参加型の見学に寄与することになるかとか、予算のこともある。専門家に聞いたり、勉強会をしながら考えていかな

いといけない。

委員 今年の行事予定にいろんなイベント的なこともあります。歴史講座や星空観望会といった地道な活動もある。そこもきちんと固めていかないと。5月4日の太陽観望会の様子、流星群の観望会の中止のこと、観望会の様子なども教えて。

委員 今現在は感染拡大防止のこともあるので予約制で、この部屋で待機していただいて、入れ替わり10分間でやっている。ペルセウス座流星群と中秋の名月については、感染拡大状況がまだ不安定でリスクがあるので今のところ中止に。

富樫 大勢が来られるということと暗い中でこちらが参加者の動きを把握しきれないことから今年中止という判断になった。太陽観望については、3階のベランダに望遠鏡を3台並べ、太陽を投影したものと、実際に覗いて、フィルターの違いで見え方がちがうというものを観望していただいた。天気も観望条件もとてもよかったが、そのわりに参加者があまり多くなかった。

委員 黒点が以前よりも多くみえるようになったのでよかった。

委員 去年参加させてもらったが、時間を区切って10分間でじっくり見ることができたので、いいやり方だと思った。

委員 ペルセウスはどこで見る予定だったのか。

委員 ベランダか駐車場のところ。

中村 よろしいでしょうか。その他次回の予定等について、確認をお願いします。

事務連絡事項等

富樫 6月下旬をお願いしたい。そのときには基本計画の資料と、今年度の特別展についてのさらに具体的な資料を用意したい。構想にうたっているように、特別展はいずれ新しい常設展示に活かせるようなものを探すという目論見がある。いずれこの町の水利用というようなコーナーをつくるとしたら、特別展の中のエッセンスがそこに反映されるということになる。

中村 それでは今日のところは、このくらいにしたい。他によろしいか。

富樫 本日の資料の最後に新建新聞社の記事がある。この館のリニューアルのことが取り上げられた。館のHPに「基本構想が出来た」という記事を掲載したところ、それが町の新しいお知らせの見出しで紹介され、それを見た新聞社がほとんど取材をしないまま記事にしたという経緯。こちらで記事にしてくれるよう新聞社にお願いしたわけではない。しかし、その結果、新聞記事を見て、問い合わせが来たりして、飯綱町はふれあい館のリニューアルを考えているということがだいぶ知られることになった。ただ、早合点ですぐに工事が始まるかと思った人もいたようだが、いずれリニューアルするために今きちんと構想を練っていると説明をしている。今回基本構想が出来たおかげで、ふれあい館ではこういう将来像を考えているということを外部にお知らせできるようになった。今後食文化に取り組む上でも、ふれあい館ではこういうことを考えている、詳しいことはHPで見られますよということをお知らせできるようになったという意味は大きい。これまでは、ふれあい館に課題がたくさんあることはわかっている、それについてどうしようとしているか、館の中にいる人でもうまく説明できないところがあった。そういう意味でも、この基本構想を今後も活用していただければ。

中村 リニューアルのこともまだ町民に方々にほとんど浸透していないわけで、たとえ「すぐ建て

替えるんかい」というような誤解があっても、話題にしてもらえるだけでもありがたいこと。それほど、歴史ふれあい館の情報はまだ町民に伝わっていないという課題が大きい。それを克服するためには、多少オーバーな表現でニュースが広がってもいいくらいだ。

富樫 3月に発刊した新しい紀要に、私と中村先生で投稿した文化財展に関する文章がある。その中に記載があるが、昨年の文化財展に訪れた町民の方は全人口の3%くらいしかなかった。それが現実であって、そのわりに来て下さった方々には「とてもよかった」という感想をいただいた。そういう意味ではちょっともったいなかったと感じるところがあった。もっともこの館に関心をもってもらうための工夫が必要だなと思っている。

中村 ぜひ宣伝していただき館に足を運んでもらう、そしてリピーターになって何度となく足を運んでもらえるような展示構想にと思っている。よろしくお願いします。それではお返すする。

閉会あいさつ

富樫 ありがとうございました。最後に教育長からごあいさつをお願いします。

馬島 長時間にわたりありがとうございました。いろいろ話し合っていく中で柱になる

ことが見えてくると感じた。今後さらに具体的な話になっていくと思うが、またよろしくお願いします。

閉会